

## 教師の話術を磨く

このテーマで書くのは、自分ができていないだけに少々気が引けます。  
しかし、実習生もいることですので、改めて考えてみることにします。

## 無理に集中させない

これは、今から15年も前に旭川の附属幼稚園の先生に教えて頂いたことです。  
ざわついているときに、教師は話し始めに、「さあ！」「はいっ」をやたらと付けるといいます。  
『さあ！みなさん今日はなにを勉強するのだったかな？』という具合です。  
これが、聞いている方にとっては、とてもプレッシャーになるということです。  
私は、意識してそれを言わないように心がけています。  
そのかわり、意味ある言葉で集中させられる表現を考えてきました。  
例えば、  
『実はね……』  
『みんな知ってるかな？』などです。  
でも、ちょっと気を許すと、『さあ！みなさん』なんて言っているのです。なかなか治りません。  
また、いきなり全員を集中させないと言うことも大事です。  
ざわついていたら、前の一人だけをまず引き込むのです。  
『伸一くん、昨日の事件知ってる？』  
「知らない」  
『史朗くんは知ってるよね？』  
こんな会話をしていると、面白そうだとまわりの子が聞き出します。

## 話し始めは、低いトーンで。

落語を生でお聴きになったことはあるでしょうか？  
噺家の第一声は、ほとんど聞こえません。  
名人といわれる人ほどそうです。  
聴いている方は、「なにをしゃべっているのだろ？」と思わず集中してしまいます。  
集中していないと、ついトーンをあげて話したくなりますが、それは逆効果です。  
ざわついている学級の先生の話し方は、いつも怒鳴り声で隣の教室まで響きます。  
幼稚園で実習したときに、「内緒話みたいに話すといいよ」とよく先生から教えて頂きました。  
私は、声量は落とさずに、トーンを下げる話し方をいつも心がけています。

助詞は、そっと置くように

『みなさん**があ**！昨日、勉強したことは**あ**！……』

こういう話し方は、結構耳にします。

本人はわかりやすく話しているつもりですが、まったく美しくない日本語です。

助詞は、割れそうな物を机の上に置くときのようにそっと言うといいです。

話術は、間術

ざわついていて、子どもにつけいる隙を与えまいとするのでしょう。

とにかく、機関銃のように話しまくる先生というのがいらっしゃいます。

常々私は「話術は間術」と思っています。

特に間をとるのは、質問文のあとです。

『朝食を食べないとどんな困ったことがあると思うかな……（ここで教室中をゆっくり一度見回す）実は、5つの悪い点があるといわれているんだ』と、こんな感じです。

話術は、眼力によって決まる

参加者180名の研修会を主催したことがあります。

体育館ほどの会場にびっしりと先生方が入っていました。

その時の講師は、野口芳宏先生、有田和正先生、酒井臣吾先生、仲田理津子先生という大御所4名でした。

どの先生も、180名の大人数対して、一人ひとりに目を合わせていました。

どなたも、「言う」のでもない「話す」でもない、「語りかける」というのにふさわしい話の仕方でした。

抽象ではなく「具体」、説明ではなく「描写」を。耳に聞こえるようにではなく、目に見えるように話す。

『先生の小学校の時の話です。先生の学校は、曲がり角のある校舎でした。上から見ると『回』こんな形の校舎ね。先生方がね、よくね、『廊下の曲がり角は走っていたら危ないからね』って注意していました。でもね、だれも言うこと聞かないの。その日もね、廊下を先生と友達は思いっきり走っていました。そうしたらね、ちょうど曲がり角、先生の前を走っていた子が、向こうから来た子と「ゴツン！」って。二人とも倒れてね、おでこのこのところを見たら、血は出ていなかったけれどね、500円玉くらいの大きさ、へこんでいてね。その子は、救急車で病院に行ったんですよ。まさか自分なるなんて思ってなかったんだよね。先生だってそうでした。でもね、目の前でそうだったんだよ。気を付けようね』

担任の時は、こんな話をよく子どもにしていました。